

外国語部会

部会長：附属高等学校 金子麻子
部会員：附属小学校 濱雪乃・前原文江
附属中学校 西平美穂・加藤理嘉・林多恵子
附属高等学校 平田智子
(大学 Claudia Gherghel)

2025 年度活動報告：2025 年度は、「12 年間の発達を踏まえた研究」を意識した授業実践、とりわけ各学校間における接続期の指導を円滑に行うための実践を討議した。加えて、大学の Gherghel 先生を不定期で部会にお招きし、多言語学習・教育や多言語習得の観点からも広く外国語を捉え、学校種ごとの様々な取り組みに活かせるような教育的示唆を得た。各回の具体的な討議内容は、以下の通りである。

第 2 回 2025 年 5 月 13 日 (火)

話題提供：高校 記録：中学校

参加者：高校 (金子・平田) 中学校 (西平・加藤・林) 小学校 (濱)

第 2 回のテーマ別部会では、今年度のテーマと年間活動計画について共有したのち、金子教諭から高校における生成 AI を活用した授業実践の報告がなされた。ChatGPT を使用した essay writing の指導に関する取り組みの報告であり、生成 AI の活用が教員の負担を減らすことに貢献するかどうかの視点で、意見交換が行われた。プロンプト作成の問題点、誤った文法的な指摘、ChatGPT の指摘を読むことの教員の負担などの問題点はあるものの、生徒は ChatGPT を使用することにほとんど抵抗がなく、文法面での有用なフィードバックも多く、ChatGPT の文法的フィードバックはその利用法を工夫すれば教員の添削作業の削減につながる可能性が示唆された。だが一方で、評価の正当性や、ある程度の文法知識がないと ChatGPT の指摘が理解できないなど、課題も確認できた。また、生成 AI を使用した指導に関して、小・中・高でもその効果や注意点が異なることがわかり、連携教育の上でも大いに参考になった。

第 3 回 2025 年 7 月 1 日 (火)

話題提供：中学校、記録：小学校

参加者：高校 (金子、平田)、中学 (加藤、西平、林)、小学校 (濱)

第 3 回のテーマ別部会では、「小学校と中学校の英語教育の連携」および「外国籍の生徒」について意見を交換した。

①小学校英語と中学校英語の“はざま”について：小学校から中学校への移行期のギャップ

が深刻であり、また、各小学校によって英語の経験の差が大きいことが問題である。小学校で英語に対してそこまで大きな抵抗感はなかった子どもたちも、中学でスペリングを覚えなくてはいけない語彙の数が急に増えることで自信がなくなっていく様子がある。どうしたら覚えられるか、という子どもからの質問が多い。漢字のように何度も練習するということもしにくい様子。ローマ字のようにいちいち母音を入れてしまう生徒もあり、地道な指導が必要である。

②外国籍の生徒の受け入れに関して：中学校は、外国籍の親を持つ生徒の受検や入学が増えていて、生活言語に問題がないので一見分かりにくいのが、日本語の理解が曖昧であるケースもあり、帰国生向けのノウハウが役に立っているような状況である。家庭では母語で生活しているため、勉強は「国語（日本語）」だけで手一杯で、2つ目の外国語である「英語」まで手が回らないケースもある。生活経験・文化体験が少ないゆえ、細かく指示を出さないと意図が伝わらないことが高校でもあるという課題を共有した。

第4回 2025年9月2日（火）

話題提供：小学校、記録：高校

参加者：高校（金子、平田）、中学（加藤、西平、林）、小学校（濱、前原）

第4回のテーマ別部会では、小学校で今年度実施した韓国の学校との交流について、話し合った。経緯としては、昨年濱教諭が参加された日韓の教員研修会(global citizenship 教育)で知り合った韓国人教諭と、5・6年生で一校ずつ交流開始した。まずはお互いを知り、英語を使いながらコミュニケーションをとることを目的として活動を開始し、その後も継続的な交流が可能であれば、徐々に内容を濃くしていく計画。9月、10月は韓国の学校が来校予定で、その前後にオンラインで交流をする予定。交流の内容は、1回目は自己紹介、2回目は日本の名所・文化紹介／お茶小の授業・教室紹介（Unit1）／お茶小の行事（Unit2）／私の一日生活紹介（Unit3）など、後半の3クラスは教科書に関連付けて画面を見せながらオンラインで会話した。6年生では「食」についての交流（比較）やまち紹介など、トピックも多岐にわたった。その後、濱教諭が韓国で視察した英語の授業の紹介を紹介し、日本との違いなどについて討議した。隣国である韓国での早期英語教育の実践を貴重な動画で垣間見ることができ、また、小学校からコミュニケーションを目的とした外国語教育を目指すことに関して再考する有意義な時間となった。

第5回 2025年11月4日

話題提供：高校、記録：中学

参加者：高校（金子、平田）、中学（加藤、西平、林）、小学校（濱、前原）

第5回のテーマ別部会では、高校で取り組む「課題研究Ⅱにおける英語指導および台湾研修について」平田教諭が発表をした。「課題研究Ⅱ」はSSHのカリキュラムの一貫として実施される、2年生全員が各々研究テーマを決めて1年間取り組む課題探究型の授業であり、

そのなかで英語科教員は英語論文の読み方、英語研究要旨作成、英語プレゼンの指導を行っている。一方で、台湾研修は、2年生30名（希望者）による3泊4日の台湾への研修であり、台北第一女子高級中学（通称：北一女）で課題研究の英語プレゼンとホームステイを行う。事前学習として2年生全体に英語論文の読み方を指導し、Abstractを実際に読む他、英語プレゼンのスライドの作り方を説明し、参加者のグループごとに英語プレゼンの添削とフィードバックを行った。実際の訪問の様子なども、写真とともに紹介された。

第6回 2025年12月2日

話題提供：中学、記録：高校

参加者：大学（Claudia Gherghel）、高校（金子、平田）、中学（加藤、西平）、小学校（濱、前原）

第6回のテーマ別部会では、大学からゲルゲル先生をお招きし、多言語学習などについてお話をうかがった。ゲルゲル先生は、社会心理学、特に prosocial behavior がご専門で、その行動における文化的な違いや、異なる文化圏の人たちがどう助け合うかを研究されている。prosocial behavior の高い人は、協働力が高い、共感力が高い、社会的規範があるなどの特徴があるが、なかには、「周りがやるなら自分も」など、他者からの影響が助け合い行動につながるケースも見られるという。日本語学習のきっかけは高校時代に日本語を学んだことで、「とにかく聞く」こと、アウトプットの機会がなくても大量のインプットを浴びることがコツ。一方で、アニメで言語を学ぶ際には、話し言葉に偏重してしまうという問題点も挙げられ、丁寧な言葉を学ぶには授業も大事であると、教室における言語指導の重要性が再認識された。その後、コンピ研で従事されているコンピテンシーの測定（自己評価）に関して、CACICA (<https://icd-sys.ao.ocha.ac.jp/ocompet/>) を紹介いただいた。カシカは毎年測定し、尺度は1～6、評価項目は30。年次報告書に評価尺度・項目（例えば、批判的思考力）を掲載している。大学側は、学生が受ける授業で育成されるコンピテンシーをシラバスに明記するように促している。非認知能力の測定には、高校ではSSH意識調査（高校が開発）、GPSアカデミック、数理探究アセスメント、小学校では「強みチェッカー」などを利用していることなど、各学校間の情報を共有した。

第7回 2026年1月20日

話題提供：中学、記録：高校

参加者：高校（金子、平田）、中学（林、加藤、西平）、小学校（濱、前原）

京都教育大学附属桃山中学校公開研究会に参加した中学の林教諭が、同校の研究「学びの価値を見出す生徒の育成を目指して」に関して報告した。同研究は、コンストラクトを意識したエージェンシーを育成する授業に、教科を越えた「転移」の要素を取り入れることにより、育まれたエージェンシーを生かして自ら学びをつなげる生徒を育成することができるという仮説のもと、教科を超えた学びに生徒が自ら気づくことで生徒の主体的な学びを促すこ

とを目的とした研究である。「転移」「エージェンシー」などの語彙の説明なども加えながら、同校の取り組みを詳細に紹介したのち、意見交換を行った。教科書を取り扱いながらこのような研究に資する授業を行うことの難しさや、適切な評価の方法、スローラーナーへのケアの必要性、エラーコレクションの重要性などの指摘があった。小学校では現在、各教科の価値を改めて見つめ直しながら、教科の枠を越えて学ぶことのできる時間や活動を増やしていこうとする流れがあるとのことで、同テーマは、中学校・高校ならではの各教科の専門性を基盤としながらそれらをどのように結び付けていくかが構想されており、小学校との取り組みとはまた異なる視点からのアプローチとして大変参考になったという意見がでた。校種の違いだからこそ見えてくる学びのあり方について、改めて考える機会となった。

以上